

20106

経カテーテル的大動脈弁置換術にて心室中隔破裂をきたし外科的修復にて救命できた一例

<sup>1</sup>岐阜ハートセンター

木下 竜臣<sup>1</sup>、恒川 智宏<sup>1</sup>、加藤 貴吉<sup>1</sup>、泉二 佑輔<sup>1</sup>、富田 伸司<sup>1</sup>

生年月日：1986年2月12日【目的】経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVR）にて左室心室中隔破裂をきたし自己心膜を用いたパッチ形成術及び大動脈弁置換術にて救命できた症例を経験したため報告する。【方法】症例はパーキンソン病にて治療中の76歳女性。労作時呼吸苦症状を伴う重症大動脈弁狭窄症を認め、重度の虚弱を理由に経大腿動脈にてTAVR（23mm Sapien3）を施行された。弁留置直後にショック状態となり、急性大動脈弁閉鎖不全（AR）及び心嚢液貯留を同時に認めた。PCPSを開始したことによりARは制御された。循環動態を安定させ、心嚢穿刺にてドレナージを行ったが出血コントロールは困難と判断され開胸手術へ移行した。開胸すると左心耳近傍より噴出性の出血を認めた。人工心肺を確立し心停止とした。人工弁を除去すると弁輪には損傷部位を認めず左冠尖右冠尖交連部直下の心室中隔に裂創を認めた。自己心膜パッチにて同部位およびその上部の弁輪まで被覆するように補強し、大動脈弁置換術（19mm CEP MAGNA EASE）を施行した。人工心肺からの離脱は容易、左心耳近傍からの出血を認めたが圧迫止血された。IABP挿入し集中治療室へ帰室。【結果】術後は再出血起こすことなく経過され、合併症なく状態改善し術後9日目に抜管、術後21日目には一般病棟管理となった。【結論】TAVRにて左室破裂をきたした症例に対し自己心膜を用いた修復が有用であった。

日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分
--------------	-------	----	----------

受付番号

演題番号